

# 対称空間上の等径関数とベクトル束

高橋 正郎 (久留米工業高等専門学校)

この講演は、長友 康行 氏 (明治大学), 福岡 敬真 氏 との共同研究によるものです。

我々は、ベクトル束を使って部分多様体の微分幾何的な性質を調べている。この講演では、ベクトル束を使っての対称空間上の等径関数を組織的な構成、対応する超曲面の性質を報告する。

## 1 準備

### 1.1 等径関数

ベクトル値等径関数を定義する。我々は、Terng [5] の定義でなく、Wang ([6], [1, p.55]) の定義を使う。

定義 1  $f = (f_1, \dots, f_k) : M \rightarrow \mathbf{R}^k$  を Riemann 多様体  $(M, g_M)$  の上のベクトル値関数とする。  $f$  に対して、次の条件を満たす関数  $F_{ij}, G_i : \mathbf{R}^k \rightarrow \mathbf{R}$  ( $1 \leq i, j \leq k$ ) が存在するとき、  $f$  を等径関数という。

$$(1) g_M(df_i, df_j) = F_{ij}(f_1, \dots, f_k) \quad (2) \Delta f_i = G_i(f_1, \dots, f_k).$$

この定義は Terng の定義より弱いことを注意しておく。  $k = 1$  のとき、これは通常のエ等径関数である。  $k = 1$  のとき、等径関数の等位集合  $f^{-1}(c)$  ( $c \in \mathbf{R}$ ) を等径超曲面という。

### 1.2 対称空間と表現に関する準備

我々が考える設定を述べる。  $(G, K)$  はコンパクト型の既約対称対とし。  $G$  と  $G/K$  は単連結とする。  $\mathfrak{g}, \mathfrak{k}$  をそれぞれ、  $G, K$  の Lie 環とし、  $\mathfrak{g} = \mathfrak{k} \oplus \mathfrak{m}$  を Cartan 分解 (標準分解) を表す。  $G$  の既約表現空間  $\rho : G \rightarrow GL(W)$  に  $G$  不変内積を一つ固定し、  $W = U \oplus V : K$  不変な直交分解とする。

この分解が  $\dim V \neq 0$  かつ  $\dim U \neq 0$  で、  $\rho(\mathfrak{m})U \subset V$  かつ  $\rho(\mathfrak{m})V \subset U$  をみたすとき、この分解を一般化された Cartan 分解と呼ぶ。(係数体を区別するときは、実数体のとき、一般化された実 Cartan 分解複素数のとき一般化された複素 Cartan 分解と呼ぶ。)

このとき、

$$G/K \rightarrow Gr_p(W), \quad gK \mapsto \rho(g)U$$

によって、  $G/K$  は  $Gr_p(W)$  の部分多様体とみなすことができる。ここで、  $p = \dim U$  である。

$Gr_p(W)$  には、  $W$  の内積から与えられる Riemann 計量をいれる。そして、  $G/K$  の Riemann 計量は、上の写像が等長写像になるように与える。このとき、  $G/K$  は  $Gr_p(W)$  の全測地的部分多様体になることがわかる。

次に、ベクトル束  $U = G \times_K U$  と  $V = G \times_K V$  に標準不変接続を与えて考える。  $w \in W, g \in G, [g] \in G/K$  に対して、

$$s([g]) := [g, \pi_U(g^{-1}w)], \quad t([g]) := [g, \pi_V(g^{-1}w)],$$

として、 $U$  の切断  $s$  と  $V$  の切断  $t$  を与える。この切断を  $w \in W$  に対応する切断と呼ぶ。ここで、 $\pi_U, \pi_V$  は、それぞれ、 $W$  から  $U, V$  への直交射影とする。

次に、

$$f = ([g]) = |s|^2([g]) \quad g \in G$$

として、 $G/K$  上の関数  $f$  を定義する。そして、 $S_0 \subset G/K : f$  を零点集合、 $S_M \subset G/K : f$  を最大値集合とし、 $H : w \in G$  の  $G$  イソトロピー部分群とする。つまり、 $H = \{g \in G | \varrho(g)w = w\}$  とする。

定義 2  $G$  の表現  $\varrho : G \rightarrow \text{GL}(W)$  について、 $W$  における主軌道 (principal orbit) が  $W$  の超球になるとき、この表現を球面型の表現と呼ぶ。

このような表現は Hsing-Hsiang [2] により分類されている。

以下、表現  $\varrho : G \rightarrow \text{GL}(W)$  は球面型とする。球面型とすると、 $w \in U \subset W$  としても一般性を失わないので、 $w \in U, |w| = 1$  とする。また、球面型の表現の中で、 $W = U \oplus V$  と  $K$  不変部分空間に分解したとき、 $\dim U \neq 0, \dim V \neq 0$  となるもののみを考える。すると、次のことがわかる。

### 補題 3

- (1)  $U, V$  は  $K$  既約である。
- (2)  $W = U \oplus V$  は一般化された Cartan 分解である。
- (3)  $S_0$  と  $S_M$  は  $G/K$  の全測地的部分多様体である。

以下、このような、 $G/K, W$  等を分類した表である。

$G/K$	$W$	$H$	$U \oplus V$	$S_0, S_M$
$\text{SU}(n)/\text{SO}(n)$	$\mathbf{C}^n$	$\text{SU}(n-1)$	$\mathbf{R}^n \oplus \mathbf{R}^n$	$\text{SU}(n-1)/\text{SO}(n-1)$
$Gr_p(\mathbf{C}^n)$	$\mathbf{C}^n$	$\text{SU}(n-1)$	$\mathbf{C}^p \oplus \mathbf{C}^q$	$Gr_p(\mathbf{C}^{n-1}), Gr_{p-1}(\mathbf{C}^{n-1})$
$Gr_p(\mathbf{R}^n)$	$\mathbf{R}^n$	$\text{Spin}(n-1)$	$\mathbf{R}^p \oplus \mathbf{R}^q$	$Gr_p(\mathbf{R}^{n-1}), Gr_{p-1}(\mathbf{R}^{n-1})$
$S^{n-1}$	$\mathbf{R}^n$	$\text{Spin}(n-1)$	$\mathbf{R} \oplus \mathbf{R}^{n-1}$	$S^{n-1}, 2\text{points}$
$Gr_4(\mathbf{R}^7)$	$S_7$	$G_2$	$\mathbf{R}^4 \oplus \mathbf{R}^4$	$G_2/\text{SO}(4), G_2/\text{SO}(4)$
$Gr_4(\mathbf{R}^8)$	$S_8^\pm$	$\text{Spin}(7)$	$\mathbf{R}^4 \oplus \mathbf{R}^4$	$Gr_4(\mathbf{R}^7), Gr_3(\mathbf{R}^7)$
$Gr_4(\mathbf{R}^9)$	$S_9$	$\text{Spin}(7)$	$\mathbf{R}^8 \oplus \mathbf{R}^8$	$Gr_4(\mathbf{R}^7), Gr_3(\mathbf{R}^7)$
$\text{Sp}(n)/\text{U}(n)$	$\mathbf{C}^{2n}$	$\text{Sp}(n-1)$	$\mathbf{C}^n \oplus \mathbf{C}^{n*}$	$\text{Sp}(n-1)/\text{U}(n-1)$
$Gr_p(\mathbf{H}^n)$	$\mathbf{H}^n$	$\text{Sp}(n-1)$	$\mathbf{H}^p \oplus \mathbf{H}^q$	$Gr_p(\mathbf{H}^{n-1}), Gr_{p-1}(\mathbf{H}^{n-1})$
$G_2/\text{SO}(4)$	$\mathbf{R}^7$	$\text{SU}(3)$	$\mathbf{R}^4 \oplus \mathbf{R}^3$	$\text{SU}(3)/\text{SO}(3), \mathbf{C}P^2$

この表で、 $S_n$  は  $\text{Spin}(n)$  の spin 表現、 $S_n^\pm$  は  $\text{Spin}(n)$  の half-spin 表現を表す。

## 2 等径関数

先程の分類にしたがって、個々に調べていく。その前に、次の補題を述べておく。

補題 4  $H$  の  $G/K$  への作用が cohomogeneity one ならば、 $f$  は等径関数である。

先程の分類表で、次の 3 つを除き、cohomogeneity one である。

$$(\text{SU}(n)/\text{SO}(n), \mathbf{C}^n), (\text{Sp}(n)/\text{U}(n), \mathbf{C}^{2n}), (Gr_4(\mathbf{R}^9), S_9).$$

この3つについて、それぞれの cohomogeneity は、順に、2, 3 and 2 である。

まず、cohomogeneity 1 のとき、この等径関数による、等径部分多様体の主曲率を述べる。なお、 $(Gr_4(\mathbf{R}^8), S_8^\pm)$  のときは、 $(Gr_4(\mathbf{R}^8), \mathbf{R}^8)$  と同様なので省略する。

(1)  $(Gr_p(\mathbf{R}^N), \mathbf{R}^N)$ ,

定理 5 関数  $f$  の正則な等位集合  $f^{-1}(c)$  の主曲率は

$$\frac{|s|}{|t|}, \quad -\frac{|t|}{|s|}, \quad 0,$$

となり、重複度は、それぞれ、 $q-1, p-1, (p-1)(q-1)$  である。

(2)  $(Gr_p(\mathbf{C}^N), \mathbf{C}^N)$ ,

定理 6 関数  $f$  の正則な等位集合  $f^{-1}(c)$  の主曲率は

$$\frac{1}{\sqrt{2}|s||t|}(|s|^2 - |t|^2), \quad \frac{|s|}{\sqrt{2}|t|}, \quad -\frac{|t|}{\sqrt{2}|s|}, \quad 0,$$

となり、重複度は、それぞれ、 $1, 2(q-1), 2(p-1), 2(p-1)(q-1)$  である。

(3)  $(Gr_p(\mathbf{H}^N), \mathbf{H}^N)$ ,

定理 7 関数  $f$  の正則な等位集合  $f^{-1}(c)$  の主曲率は

$$\frac{1}{2|s||t|}(|s|^2 - |t|^2), \quad \frac{|s|}{2|t|}, \quad -\frac{|t|}{2|s|}, \quad 0,$$

となり、重複度は、それぞれ、 $3, 4(q-1), 4(p-1), 4(p-1)(q-1)$  である。

(4)  $(Gr_4(\mathbf{R}^7), S_7)$ ,

定理 8 関数  $f$  の正則な等位集合  $f^{-1}(c)$  の主曲率は

$$\frac{\sqrt{3}}{12} \frac{1}{|s||t|} \left\{ 3(|s|^2 - |t|^2) \pm \sqrt{9 - 4|s|^2|t|^2} \right\}, \quad 0,$$

となり、重複度は、それぞれ、 $3, 3, 5$  である。

(5)  $(G_2/SO(4), \mathbf{R}^7)$ ,

定理 9 関数  $f$  の正則な等位集合  $f^{-1}(c)$  の主曲率は

$$\frac{1}{\sqrt{6}} \frac{1}{|s||t|} \left\{ (|s|^2 - |t|^2) \pm \sqrt{1 - |s|^2|t|^2} \right\}, \quad -\sqrt{\frac{2}{3}} \frac{|t|}{|s|}, \quad 0,$$

となり、重複度は、それぞれ、 $2, 2, 1$  and  $2$  である。

### 3 cohomogeneity が 2 以上のとき

このとき、 $f$  は等径関数にはならない。しかし、他のベクトル束から与えられる関数を使うと、 $\mathbf{R}^k$  値等径関数を得られる。これから、等径関数を得ることができる。

(6)  $(\mathrm{SU}(n)/\mathrm{SO}(n), \mathbf{C}^n)$

$\mathbf{C}^n$  の一般化された Cartan 分解は,  $z = x + iy \in \mathbf{R}^n \oplus i\mathbf{R}^n \cong \mathbf{R}^n \oplus \mathbf{R}^n$  となるので,  $V = \mathrm{SU}(n) \times_{\mathrm{SO}(n)} \mathbf{R}^n$  と  $U = \mathrm{SU}(n) \times_{\mathrm{SO}(n)} \mathbf{R}^n$  を自然に同一視する. その上で,

定理 10  $F := (|s|^2 - |t|^2, 2g_U(s, t))$ . とおくと,  $F$  は  $\mathrm{SU}(n)/\mathrm{SO}(n)$  上の  $\mathbf{R}^2$  値の等径関数である. また,  $\tilde{f} = |F|^2 = (|s|^2 - |t|^2)^2 + 4g_U(s, t)^2$  とおくと,  $\tilde{f}$  は  $\mathrm{SU}(n)/\mathrm{SO}(n)$  の通常の意味の等径関数である.

定理 11 関数  $\tilde{f}$  の正則な等位集合  $\tilde{f}^{-1}(\cos^2 2\theta)$  の主曲率は

$$\frac{1}{\sqrt{2}} \tan \theta, \quad -\frac{1}{\sqrt{2} \tan \theta}, \quad \sqrt{2} \tan 2\theta, \quad 0,$$

となり, 重複度は, それぞれ,  $n-2, n-2, 1, \frac{1}{2}(n-1)(n-2)$  である.

このとき,  $\mathrm{SO}(n)$  より大きい  $\mathrm{SU}(n)$  の部分群があり,  $\tilde{f}$  はその群の作用で不変な関数である. また,  $\mathrm{SO}(n)$  の  $\mathrm{SU}(n)/\mathrm{SO}(n)$  への作用は hyperpolar にならず,  $F$  の正則値  $c$  に対する等位集合  $F^{-1}(c)$  は equifocal submanifold にならない

(7)  $(\mathrm{Sp}(n)/\mathrm{U}(n), \mathbf{C}^{2n})$

$\mathbf{C}^{2n}$  の一般化された Cartan 分解は,  $\mathbf{C}^{2n} = \mathbf{C}^n \oplus \mathbf{C}^{n*}$  となるので,  $V = \mathrm{Sp}(n) \times_{\mathrm{U}(n)} \mathbf{C}^{n*}$  は  $U = \mathrm{Sp}(n) \times_{\mathrm{U}(n)} \mathbf{C}^n$  の双対束になる. その上で,

定理 12  $F := (|s|^2 - |t|^2, 2(s, t))$ . とおくと,  $F$  は  $\mathrm{Sp}(n)/\mathrm{U}(n)$  上の  $\mathbf{R}^3$  値の等径関数である. ここで,  $(s, t)$  は双対性を表す内積である. また,  $\tilde{f} = |F|^2 = (|s|^2 - |t|^2)^2 + 4|(s, t)|^2$  とおくと,  $\tilde{f}$  は  $\mathrm{Sp}(n)/\mathrm{U}(n)$  の通常の意味の等径関数である.

定理 13 関数  $\tilde{f}$  の正則な等位集合  $\tilde{f}^{-1}(\cos^2 2\theta)$  の主曲率は

$$\frac{1}{\sqrt{2}} \tan \theta, \quad -\frac{1}{\sqrt{2} \tan \theta}, \quad \sqrt{2} \tan 2t, \quad -\frac{\sqrt{2}}{\tan 2\theta}, \quad 0,$$

となり, 重複度は, それぞれ,  $2n-4, 2n-4, 2, 1, n^2-3n+4$ , である.

このとき,  $\mathrm{U}(n)$  より大きい  $\mathrm{Sp}(n)$  の部分群があり,  $\tilde{f}$  はその群の作用で不変な関数である. また,  $\mathrm{U}(n)$  の  $\mathrm{Sp}(n)/\mathrm{U}(n)$  への作用は hyperpolar にならず,  $F$  の正則値  $c$  に対する等位集合  $F^{-1}(c)$  は equifocal submanifold にならない

(8)  $(\mathrm{Gr}_4(\mathbf{R}^9), S_9)$

$S_9 = S_4^+ \otimes S_5 \oplus S_4^- \otimes S_5$  なので,  $U = \mathbf{R}^8 = S_4^+ \otimes S_5, V = \mathbf{R}^8 = S_4^- \otimes S_5$  とする. すると,

$$U \otimes V = \mathbf{R}^4 \otimes (\mathbf{R} \oplus \mathbf{R}^5 \oplus \mathfrak{so}(5)),$$

となる.  $\pi_0$  を直交射影とする.  $\pi_0 : U \otimes V \rightarrow \mathbf{R}^4$

このときも,  $f = |s|^2$  は等径関数ではないが,  $\tilde{f} := |\pi_0(s \otimes t)|^2$  は等径関数になる.

定理 14  $F := (|s|^2 - |t|^2, \tilde{f})$ . とおくと,  $F$  は  $\mathrm{Gr}_4(\mathbf{R}^9)$  上の  $\mathbf{R}^2$  値の等径関数である.

このとき,  $\mathrm{Spin}(7)$  の  $\mathrm{Gr}_4(\mathbf{R}^9)$  への作用は hyperpolar にならず,  $F$  の正則値  $c$  に対する等位集合  $F^{-1}(c)$  は equifocal submanifold にならない

## 4 Radon 変換

我々の考えている場合,  $G$  は  $\pi : G \rightarrow G/K$  と  $\psi : G \rightarrow H \backslash G$  と二つの fibration をもつ .

球面型の表現  $W$  を考えているので,  $H \backslash G$  は  $W$  の超球になることを注意しておく .

次に,  $d\mu$   $H$  の正規化された Haar 測度とする .  $d\mu$  が誘導する  $\psi : G \rightarrow H \backslash G$  のファイバーの測度も  $d\mu$  で表す . このとき,  $G/K$  上の任意の関数に対する Radon 変換  $R : C^\infty(G/K) \rightarrow C^\infty(H \backslash G)$  を

$$R(f)(x) = \int_{\psi^{-1}(x)} \pi^* f d\mu, \quad x \in H \backslash G.$$

で定義する . この Radon 変換により, 我々の等径関数は球面上の等径関数を導く .

定理 15  $H$  の  $G/K$  への作用が cohomogeneity one のとき,  $\tilde{f} = |s|^2 - \frac{p}{N}$  ( $p = \dim U$ ) とすると,  $R(\tilde{f})$  は  $W$  の単位超球の等径関数になる . 固有値の重複度は 2 である .

実際, 今の場合は,

$$R(\tilde{f}) = \frac{1}{N} \left\{ q \sum_{i=1}^p x_i (g^{-1}w)^2 - p \sum_{\alpha=p+1}^N x_\alpha (g^{-1}w)^2 \right\}.$$

となる .

定理 16  $H$  の  $G/K$  への作用が cohomogeneity two 以上のとき,  $\tilde{f}$  の Radon 変換  $R(\tilde{f})$  は  $W$  の単位超球の等径関数になる . 固有値の重複度は 4 である .

この場合も具体的に関数を書くことができる .  $SU(n)/SO(n)$  のときは, 野水先生の等径関数 [4] になる . また, 出てきた球面の等径超曲面はすべて等質になっている .

## 参考文献

- [1] J.Eells and A.Ratto, Harmonic Maps and Minimal Immersions with Symmetries, Ann.Math.Studies **130**, Princeton University Press, Princeton (1993)
- [2] W.C Hsiang and W.Y. Hsiang, *Differential actions of compact connected classical groups: II*, Ann. of Math. **92** (1970), 189–223
- [3] Y.Nagatomo and M.Takahashi, *Vector bundles, isoparametric functions and Radon transforms on symmetric spaces*, Osaka J. Math. **56**(2019), 675–711
- [4] K.Nomizu, *Some Results in E.Cartan's Theory of Isoparametric Families of Hypersurfaces*, Bull.A.M.S. **79** (1973), 1184–1188
- [5] C.-L.Terng, Isoparametric Submanifolds and Their Coxeter Groups, J. Diff. Geom. **21** (1985), 79–107
- [6] Q.-M. Wang, *Isoparametric maps on Riemannian manifolds and their applications*, Adv. in Sci. of China Math. **2** (1987), 79–103